1面から続く

昨冬以来の訪問となった岩手県大槌町。東日本大震災で甚大な被害を受けたこの町では国際医療ボランティアAMDA（岡山市）が現地拠点「大槌健康サポートセンター」を設け、息の長い支援を続ける。

「この1年間、センターの活動はいろいろ変化があってね。毎日忙しいのよ」

出迎えてくれたセンター長の佐々木賀奈子さん(54)は笑う。鍼灸(しんきゅう)師の資格を持ち、事務所併設の施術スペースを使って被災者の心と体を癒やしている。

ズーム

岩手県大槌町　県南東部に位置し、太平洋に面している。面積は200・59平方キロ。サケの水揚げやホタテ養殖、ワカメ生産といった漁業が主産業。人口は1万2778人（1月末現在）。沖合にある蓬莱島は、かつてNHKで放送された人形劇「ひょっこりひょうたん島」の舞台のモデルといわれる。

時の刻みは ～震災6年 岩手・大槌から～

① 再建途上

自宅と仮設 距離感も

昨年5月、住民らの交流イベントを担当していたスタッフ2人が独立し、新たなボランティア団体を立ち上げた。佐々木さんはそのスタッフの担当を引き継ぐ形で、鍼灸治療の合間に、さをり織りや郷土料理の教室を開催している。

鍼灸治療の傍ら、さをり織り教室を開く佐々木さん（右）。被災者と触れ合い、心も癒やす＝2月8日、岩手県大槌町

「自宅や家族を失い、ふさぎ込んだ人は少なくない。外に目を向けるきっかけになれば」と佐々木さん。経営していた鍼灸診療所が被災し、再建のめどが立たないなど自身も悩みがある。触れ合いをばねに、みんなで苦境を乗り切りたいと考えている。

◇　◇

大槌町は中心部の半分が津波にのみ込まれ、家屋4375棟のほか、町役場や小学校など公共施設も被災した。死者・行方不明者は1285人に上る。医療支援で現地入りしたAMDAは震災から9カ月後の2011年12月、健康相談の場としてサポートセンターを開設した。被災者を中心に約500人が利用している。

当初から運営に関わる佐々木さん。この6年、被災者にずっと寄り添い、心の変遷を見つめてきた。みんな被災後しばらくは「家族は元気か」をあいさつ代わりに互いの近況を話した。だが、次第に心の内を明かさなくなってきたという。

「多くが仮設暮らしを余儀なくされる一方、既に自宅を再建した人もいる。そうした立場の違いから言葉が刃物になってしまう」

センター利用者の日笠睦子さん(59)は前回の取材時、まだ仮設暮らしだった。住宅を建てる土地の権利が抽選で当たったものの、同じ仮設の住民に知らせることができないでいた。自宅の再建は共通の願いだが、多くの人が実現できずに思い悩んでいたからだ。

昨年11月に新居へ移り、夫、息子と3人で新しい生活を始めた。今でも、以前にいた仮設住宅を訪ねるし、当時親しかった人は自宅に来てくれる。ただ、気兼ねがないと言えばうそになる。「早くみんなが同じ立場になってほしい」と願う。

一方で心の傷はいまだに癒えない。日笠さんは食事の支度をしているとき、津波で亡くした親類や友達を思い出す。「あの人ならどんなおかずをつくったかな」。ふいに頭をよぎり、涙が出る。

◇　◇

「岡山では大きな災害が起こらないと考えては駄目。いざというときの行動を事前に決めておいて」

2月17日、岡山市内で開かれた講演会。佐々木さんは大槌町の現状を説明した後、参加者にこう呼び掛けた。6年たって震災の記憶が薄れることを防ごうと、AMDAが主催。佐々木さんはこれまでの支援への感謝を伝えたいと思い、講師を引き受けた。

「震災では人のつながりの大切さを思い知った。岡山の人たちには被災地を忘れないでほしい。何かあれば私たちも全力で支える」

（秋山昌三）